

農林水産大臣賞受賞

誰もが帰ってきたくなる みんなのふるさとを作っていく

あせみ かわかつせいかすいしんいいんかい
受賞者 汗見川活性化推進委員会

ながおかくんもとやまちょう
(高知県長岡郡本山町)

■ 地域の沿革と概要

本山町は、高知県の最北部、四国のほぼ中央部に位置し、標高は250m～740mと急峻な山地に囲まれ、89.1%を森林が占めている。北側には、四国山地の険しい峰々が連なり、愛媛県と境を接し、石鎚山系に源を発した吉野川が地域のほぼ中央南よりを東進し、大豊町で北に向きを変え、徳島県との境を越える。

吉野川沿いには、河岸段丘と細長い平野が形成され、とくに吉野川と支流である汗見川が交わる部分では、大きな扇状地が形成されている。これにより、四国山地の中にあって、口を開けた平野部が作り出されており、この地理環境から、古来より瀬戸内地域と太平洋地域を結ぶルートの中継地として、活用されてきた。

このような土地から出土した土器は、太平洋側の特徴を持ちつつ、各地の影響を受け、独自の発展を遂げていることから「松ノ木式土器」と名付けられ、標式設定されていることや、出土物からマダイの骨があることから、紀元前より汗見川を遡り瀬戸内地域との物流をしていた歴史が見られる。

このように四国を中心に他地域との繋がりを持ちながら、集落形成を遂げ、古くから人や物が行き交い交流を深めることで、集落が活性化し、産業が発展してきた歴史をもつ。

第1図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

本山町西北部を流れる吉野川の支流汗見川流域の坂本・立野・沢ヶ内・屋所・七戸・瓜生野の6集落とその周辺地域は、親しみを込めて汗見川地区

または汗見川地域と呼ばれている。

6集落の面積は約6,200㎡、森林率が約5割、農地はわずか18haほどである。昔から林業が盛んな地域であったが、木材の輸入や国産材の価格低迷等が原因で林業が衰退し、営林署の事業所が廃止されたことにより事業が縮小された。年々人口が減少し、地域の高齢化率は5割を超える。

この地域は、春には岸ツツジが汗見川河畔を紫色に彩り、夏には川遊びやキャンプを楽しむ人たちで賑わい、秋には色とりどりの紅葉が目を楽しませてくれる季節の移り変わりが大変美しい地域である。

また、自然が生み出した、県指定記念物が多く存在し、海水との接触も見られ約一億年の時の流れを感じることができる枕状溶岩、日本最大の層厚を有し、世界でも類を見ない結晶配列をもつ奥工石山おくくいしやまの紅簾石珪質片岩大露頭部、切り株や倒木の株の上でヒノキが育つことを何世代も繰り返されている根下がりヒノキなど県内でも有数の自然環境を誇る地域である。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

本山町汗見川地区は6集落、98世帯、175人、高齢化率54.8%、過疎・高齢化が進み、林業が主な産業で農地は少なく、水稻やしその栽培などが営まれているが有害鳥獣被害が大きな負担となっている。

汗見川地域は、昭和47年に「汗見川を美しくする会」の発足以降、川が持つ副次的効果から様々な諸団体が設立されてきた。現状に危機感を募らせて

ていた地域住民は、地域の継続と活性化を目指し、平成11年に汗見川活性化推進委員会を設立し、地域活性化計画を策定した。実施計画に基づき、平成13年からは、地域住民自らが、ふれあいの郷清流館を拠点とした交流事業や県道の草刈りや杉林の伐採等の景観活動など幅広い活動を始めた。

しかし、活動も10年以上経過し活動のマンネリ化、メンバーの固定化が課題となる中、高知県が進めている「集落活動センター事業」の提案が、県・本山町からあったことから、平成24年に高知県第1号の集落活動センターである「集落活動センター汗見川」の運営を開始し、現在に至っている。



写真1 汗見川活性化推進委員会

(2) むらづくりの推進体制

汗見川活性化推進委員会は、4部会（地域づくり推進部会、人づくり・健康づくり推進部会、汗見川ふれあいの郷清流館運営委員会、森づくり推進部会）が中心となり、県道と河川の間

森づくりの推進、都市部との交流として、岸ツツジツアー、汗見川清流マラソン、にこにこ運動会や地域ミニデイ、汗見川の保全活動などを実施し、地域の課題に取り組んでいる。

平成20年からは、廃校を活用した宿泊施設「汗見川ふれあいの郷 清流館」の管理運営、併せて体験インストラクターの育成、交流活動の推進等交流拠点として活動に取り組んでいる。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

汗見川地域は、「白髪ヒノキ」の産地として良質な木材を保有していたことから林業が盛んであった。戦国時代には、豊臣家への献上品として取り扱われ、江戸時代には、土佐藩が大坂で日本初の木材市場を開き、重要な収入源としていた。なお、この地は、現在も「大阪木材市売市場発祥の地」とかかれた石碑があり、親しまれている。

このような歴史背景も伴って、地域住民の中には、郷土に対する誇りが根付いていることや、川が持つ副次的効果から、「汗見川を美しくする会」が昭和47年に設立され、地域を地域で守っていくという意識が熟成されてきた。

そうした中、地域活動のきっかけとなる「汗見川活性化推進委員会」が平成11年に設立されたことで、地域活性化計画に基づいた交流事業や景観活動などの取組をはじめた。

地域活動を継続ある体制としていくため、“清流館”を拠点に、農山村体験や地域の魅力づくりで、地域外からの交流人口を受入れ、宿泊利用による収入の向上としそ商品の原料加工で地域ビジネスを展開している。また、地域内の6集落の住民が主体的に拠点事業に取り組むこと



写真2 歴史の繋がりから大阪でのイベント参加

により、地域人材の育成、地域の支え合いや魅力ある地域を継続することで新たな人材の受入に結びつけると共に、住民の生きがいを推進している。

2. 農業生産面における特徴

(1) 汗見川ふれあいの郷清流館事業

平成 20 年から、人口減少のため廃校となった沢ヶ内小学校を活用した体験型宿泊施設“汗見川ふれあいの郷清流館”の運営を開始し、宿泊の受入とそば打ち体験などの田舎体験を実施している。体育館、集会所、体験研修棟が整備されており、研修や合宿、イベントに利用される。

宿泊施設である清流館は1階が鉄筋コンクリートで、2・3階が木造建築の温かみを感じられる校舎となっている。黒板や本棚などは学校時代の面影を残しており、宿泊者が自分の子供時代を感じられる空間になっている。

農山村体験では、指導者の育成と原材料の確保など、受入体制の確立を図り次の体験プログラムを用意している。

ア グリーンウッドワーク体験

れいほく
嶺北（高知県大豊町、本山町、土佐町、大川村）産の生木を削って、スプーンや一輪挿しなど暮らしの道具をつくる体験。削り馬（加工する生木を固定する道具）に座り、せん（専用の刃物）で生木を削り加工体験を行っている。



写真3 グリーンウッドワーク体験

イ 石窯ピザ焼き体験

生地を伸ばして、地元でとれた山菜や野菜、果物をトッピングしたピザを薪と石窯で焼き上げるピザ焼き体験を行っている。

ウ そば打ち体験

地域の伝統食であるそばの更なる磨きあげとして、地域で昔から受け継がれてきた種を使って、刈り取りから脱穀までの一連の栽培を体験し、地元そば打ち名人に教わる手打ちそば作り体験を行っている。汗見川産のそばを100%使用し、地元で採れた野菜や山菜、特産品の原木しいたけを盛り付ける。

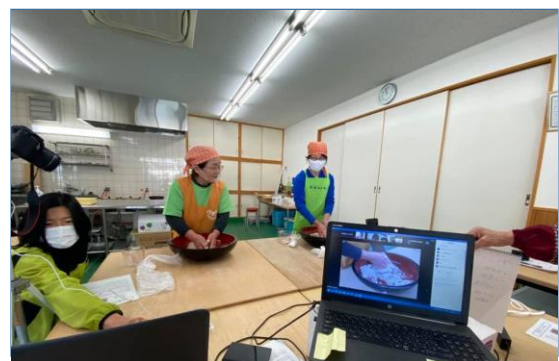


写真4 そば打ち体験（オンライン）

年々高齢化が進む中、栽培技術や種の継承など、地域の文化が失われることが懸念されていたが、定番イベントとなっている「そばの収穫祭」が行われるほどになった。

また、令和2年からはコロナ禍で活動が縮小される中、オンラインでのそば打ち体験を実施し、新たな生活様式に対応した取組も行っている。

エ 白髪山登山 八反奈路コース

土佐藩の財政難を救ったといわれ、献上木となった「白髪ヒノキ」の名残をみることができ、天然ヒノキの群生があり、個性的な根下がりヒノキの根の下を通ることもできる。また、四季折々の植物、しゃくなげやツツジなどの花々を楽しむことができる。

オ 竹箸・竹の器づくり

地元の山から切り出してきた竹を使用して自分好みの箸や器を作る体験を行っている。

カ 汗見川の自然をご自宅に♪丸くて可愛い「コケ玉作り」

土台となる土玉に好きな草花を植え、コケで丸く包み込みコケ玉を作る体験を行っている。

(2) しそ事業

地域全体の活性化に向けて、地域の女性や移住してきた地域おこし協力隊の女性による、既存加工品のブラッシュアップを行った。

しその原液を活用した、シソアイス・しそドリンクを試作、販売してきた。地域で長年作られてきたしそドリンクを製造する汗見川生活改善グループの高齢化が進んできたため、地域の伝統を残すために、地元企業と協力し、希釈タイプのしそドリンクをもとに平成28年「しそごごち」が誕生した。汗見川地域だけで栽培・煮出したしそを使ったしそジュースで、平成28年「高知家のうまいもの大賞2018」にてamazon賞を受賞し

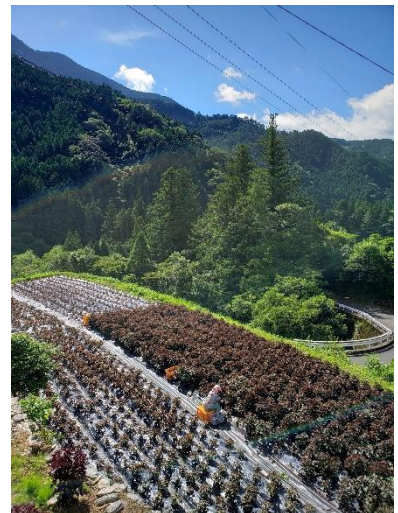


写真5 しそ収穫の様子

た。関東関西のコープ、イオンやナチュラルローソンなど大都市圏を中心に人気商品となっており、令和元年には年間販売数15万本を達成した。

しその商品化を通じ、魅力ある地域づくりの取組や宿泊施設「清流館」の運営などがテレビ取材や視察研修などで全国から多くの視察の受入に繋がるなど、情報発信に結びついている。

(3) 汗見川ランチバイキング

平成 26 年から年に数回体育館を活用し、地域で育てた旬の野菜や、山菜料理など、十数種類のメニューが楽しめるバイキングを実施してきた。多いときには地区内外から 100 名ほどの方が参加し、体育館がいっぱいになるほどの盛況であった。

令和 2 年度からは、コロナ禍の影響もあり活動が縮小されたが、ランチバイキングのノウハウを活かしたお弁当のテイクアウトや食事会形式で行うなど新たな生活様式に対応した取組が進められている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 交流人口の拡大

汗見川地域では、ふれあいの郷清流館を拠点に「河川」を題材とした体験イベントと幅広い層が楽しめる地域イベントを実施することで、交流人口を増やしてきた。汗見川の四季は、春に岸ツツジ・しゃくなげが咲き誇り、夏にエメラルド色に輝き、秋には川面に映る美しい紅葉、冬に数日の希少な雪化粧がみられる。汗見川の四季折々の魅力を活かした体験・地域イベントが実施されている。

ア 岸ツツジほのぼの体験ツアー

毎年 4 月に汗見川沿いを紫色に彩り、汗見川の春を告げる定番イベントであり、平成 4 年から開催されている。地元ガイドの案内で汗見川兩岸の岸ツツジを眺めながらウォーキングして清流館に向かう。昼食は地元食材をふんだんに使った山菜料理をいただき、午後は農山漁村体験が行われる。

イ 夏の汗見川を満喫できる川遊びイベント「ちっとええぜよ汗見川」

エメラルドグリーンに輝く汗見川の持つ美しさや生き物観察、昔ながらの川遊びを題材として、地元スタッフがガイドを務めるワークショップが実施される。都市との体験交流事業を深め、体験を通じて、川の持つ役割や、保全活動の大切さを継承していくイベントを実施している。

ウ 高知・本山汗見川清流マラソン

昭和 61 年から、地域の各組織と連携し、開催されており、平成 22 年の第 23 回大会から、新たにハーフの部を設け内容のリニューアルを図った。その結果、地域一丸となった手作りのマラソン大会ということが人気を博し、例年、インターネットによる申込が僅か数分で定員（1000 名）に達するなど、人気の大会になっており、全国各地の参加者と交流を深めた。

夏にあるマラソン大会はめずらしく、全力で走り抜けた後に川で涼むのが気持ちいいと人気の行事になっており、汗見川の夏の風物詩となっ

ている。

(2) 環境保全・景観整備の取組

平成 13 年から住民が利用している県道から汗見川地区まで河畔沿いの 5 カ所、約 2 ha の杉等の植林を地権者の協力を得て伐採し、広葉樹（ケヤキ、サクラ、モミジ等）への樹種転換を実施した。見通しが悪く冬場に道路が凍結していたが、伐採により見通しが良くなり、交通の利便性が向上した。併せて実施した岸ツツジの保全により、景観が向上した。



写真 6 県道の景観保全活動

(3) 地域ファンクラブ「ちっとええぜよ汗見川」

過疎高齢化により地域活動に参加できる人が年々減少していることを受け、地域外の方の力を借りることで、住民と協働で汗見川地域の自然や文化、歴史を大切にし、暮らしを守り、住んでよかった、住んでみたい、行ってみたいと思われるような、地域を元気にする活動に繋げていくことを目的に地域ファンクラブ「ちっとええぜよ汗見川」が創設された。

ファンクラブにより、新たな交流の場が生まれ、地域内外関係なく汗見川に関心のある人が集まって楽しむことで、地域活性化に繋がっている。

公式 LINE を開設し、季節限定イベントのお知らせや出店情報、宿泊体験施設のこと、汗見川地域の情報をいち早く届けている。